



hina no marebito のまれびと

川には死体が多数浮かび、死臭が凄かつた。あんたらを同じ目に遭わせとうな「い」など原爆の凄惨さを心に刻ませた。

核兵器禁止条約の発効を目指す

日本被団協事務局次長
長野県原爆被害者の会会長

藤森俊希氏
(75)
ふじもりとしき

昭和20年8月6日、広島市に原子爆弾が投下された。これは米国による人類史上初の核兵器での都市攻撃だつた。結果、56万人が被爆、その年14万人が亡くなつた。広島市牛田（現・東区牛田）で被爆した藤森俊希氏は、広島市立第一高女1年の姉を喪つた。氏はまだ1歳4か月で当時の記憶がない。一家は毎

年8月6日に広島平和記念式典に参加し手を合わせる。自宅へ戻ると、母親が疎開していた姉兄達に「原爆で自宅全焼。山へ逃げた。焼け残った木々で掘つ立て小屋を建て家族11人で暮らした。太田川には死体が多数浮かび、死臭が凄かつた。あんたらを同じ目に遭わせとうな



火傷のために医師から「助からんだろう」と宣告された。小学校に上がる直前まで、中学では野球部に所属し3年で主将・捕手を務め、早稲田大ワンドーフォーゲル部では名山を踏破するなど元気に勉強とスポーツに勤しんだ。

62歳で定年退職し、福生市から長野県茅野市に転居。同時に長野県の原爆被害者の会に加入すると「手伝つてほしい」と言われた。相手は同じく広島出身の被爆者で曰本原水爆被害者団体協議会（被団協）草創期のメンバー前座良明氏。長野県立科町で野市の語り部が好評で次第に依頼が増え、前座氏の推挙で日本被団協事務局次長に就任。2017年3月に国連で家族を喪ったことと核兵器を廃絶しようと呼びかけたことに大きな拍手を得た。「とにかくにもう122カ国が核兵器禁止条約に賛成してい

るので、時間はかかっても必ず50カ国が批准している」と言う。核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）の2017年ノーベル和平賞受賞式には選考委員会の要請で列席、サーロー節子氏の感動的な講演を聴いた。

被害者の高齢化で藤森氏は語気を強める。「2020年核兵器不拡散条約（NPT）運用検討会議に私達も訪米し、共鳴する米国の国会議員と連携していく。原爆に使われたプルトニウムが生産された米国ワシントン州リッチランドの高校へ留学した福岡の高校生が『自分にとってのキノコ雲は犠牲になつた人と今の平和を心に刻むもの。キノコ雲の下にいたのは兵士ではなく市民。罪のない人命を奪つて誇りに感じるべきだろうか?』との意見を述べ、地元紙などが報じ大きな反響を呼んだ。今後、若い人達にも大いに期待したい」と結んだ。

るので、時間はかかっても必ず50カ国が批准書等を提出し、条約が発効するものと信じている」と言う。核兵器廃絶国際カンペーン（ICAN）の2017年ノーベル平和賞受賞式には選考委員会の要請で列席。サーロー節子氏の感動的な講演を聴いた。

被害者の高齢化で藤森氏は語気を強める。「2020年核兵器不拡散条約（NPT）運用検討会議に私達も訪米し、共鳴する米国の国会議員と連携していく。原爆に使われたプルトニウムが生産された米国ワシントン州リッチランドの高校へ留学した福岡の高校生が『自分にとってのキノコ雲は犠牲になつた人と今の平和を心に刻むもの。キノコ雲の下にいたのは兵士ではなく市民。罪のない人命を奪つて誇りに感じるべきだろうか?』との意見を述べ、地元紙などが報じ大きな反響を呼んだ。今後、若い人々にも大いに期待したい」と結んだ。